
ドラえもののび太のバイオハザード

エイプリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもののび太のバイオハザード

【Nコード】

N6532X

【作者名】

エイプリル

【あらすじ】

東京都練馬区月見台すすきが原でバイオハザードが発生した。

生き残った住民たちは、街から生きて脱出すべく、襲い来るゾンビたちと死闘を繰り広げる。

果たして彼らに明日はあるのか？

プロローグ

プロローグ

――2122 A・D・

『……ニュースをお伝えします。恐竜密猟の容疑でタイム・パトロールに逮捕され、重罪刑務所で服役中だった元大富豪のドルマン・スタイン受刑者が、きのう脱獄しました。脱獄した詳しい経緯について、当局はいまのところコメントを差し控えています。スタイン受刑者は依然逃走中とみられ、警察とタイム・パトロールは行方を追っています』

『……次のニュースです。現在、世界各地であらゆるタイムマシンが使用できなくなっています。このタイムマシンの不調はきのうから断続的に続いており、復旧の目処は立っていません。メーカー各社の発表によると、トラブルが報告されたいずれのケースでもマシンそのものに異常は確認できないとのことで、原因は全く分らないとしています。これについて、時空物理学の専門家は、今回のトラブルは時空間に生じた何らかの異常が原因ではないかと指摘しています。この問題に関して、政府は目下原因を究明中としており、復旧にはかなり時間が掛かりそうです』

――2005 A・D・

『……東京に本部を置く大手製薬メーカー・アンブレラ社と、アメリカのハイテク産業大手サイバーダイナ社は、きょう都内で行った合同記者会見で、経営統合する方針を示しました。アンブレラ社は医薬品の分野で世界最大手。一方のサイバーダイナ社も、ハイテク

産業部門において業界トップです。91年に起こった本社襲撃事件以降、一時業績不振に悩まされていましたが、2000年以降に新たな経営陣の元で再建が進められ、昨年には史上最高益を計上しました。市場は、両社が互いの得意分野を持ち寄ることで、技術革新に新たな道を切り開くのではないかと注目しています。一方、EUはこの統合が独占禁止法に抵触するのではないかと懸念を示しています』

登場人物Part 1（前書き）

中途半端ですが、登場人物紹介をさせていただきます。

ストーリーがある程度進んだら、内容を更新します。

登場人物Part 1

名前の後ろの（）内は、その人物の文章上での呼称です。

・ドラえもん（ドラえもん）

装備

メイン武器：金属バット

防具

：MTV、ヘルメット

いわずと知れた主人公。

存在自体がネタである。狸という怒るので、本人の前では決していってはいけない。

かなりの軍ヲタで、密かに米軍の装備品を収集していた。そのため、クルマと武器にやたらと詳しい。

一応、未来の高級ロボットなので、スペックはそれなりに高い。しかし、あまり多くを期待してはいけない。

運転はかなり荒い。

本人いわく、手先は器用な方。

なぜか台詞の端々にパロディネタが散りばめられている。

・野比のび（のび太）

装備

メイン武器：ゴルフクラブ（ミズノ7番アイアン）

サブ武器：関の刺身包丁

防具

：MTV、ヘルメット

いわずと知れた主人公。

普段はまるつきりヘタレだが、劇場版など正念場では力を発揮する。

射撃とあやとりの天才。しかし、あやとりの才能は今回はまず役に立たないと思われる。

序盤はまるつきり良いところが無かったので、ここからどう活躍するかが見物である。

・源靜香（靜香）

装備

メイン武器：豊和M300（ホーワカービン）

ヒロイン。

のび太のガールフレンド。

ジャイ子ルートを離脱した後の、のび太の将来のお嫁さん候補である。

ゲーム『のびバザ』では、新ヒロインの聖奈に押されて陰が薄いが、今作ではどうか？

・剛田武（ジャイアン）

装備

メイン武器：ベネリM3スーパー90（ショットガン）

町のガキ大将。

巨漢で、喧嘩では中学生とも互角に戦える実力を持つ。

劇場版では「きれいなジャイアン」として活躍する。今作におけるジャイアンのキャラ設定も、どちらかというと「きれいなジャイアン」寄りである。

・骨川スネ夫（スネ夫）

装備

メイン武器：タイガー（ドラグノフ狙撃銃）

会社社長の父を持つお金持ち。

しかし、なぜかジャイアンの腰巾着に甘んじている。

現在メンバーが持っている武器のほとんどは彼の家にあったもの。

・緑川聖奈（聖奈）

装備

メイン武器：鉈（ククリノグルカナイフ）

サブ武器：S & W M 3 6 0 “サクラ”（リボルバー拳銃）

ゲームのオリキャラ。

のび太の学校の生徒会長で、かなりの美少女だ。

医療の技術も有している。

・翁蛾健治（翁蛾）

装備

メイン武器：ベレッタM 2 8 0 0 スキート（ショットガン）

サブ武器　：ナイフ

フリーター。

ゲームのオリキャラである。

ゲームではあまり活躍できなかったが、今作ではどうか？

・金田正宗（金田）

装備

メイン武器：モロト・ヴェーブル308（ライフル）

町内会長。

ゲームのオリキャラ。

家族をゾンビに殺されたショックで、情緒不安定になっている。
ゲームでは悲運なキャラとして描かれるが、今作ではどうか？

・山田太郎（太郎）

装備

メイン武器：なし

小学一年生。

ゲームのオリキャラ。

ゲームでは全く戦闘に参加していないにも関わらず、ちゃっかり
生存できるキャラだが、今作ではどうか？

登場人物Part 1（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

幕間（前書き）

まだゾンビは出てきません。

幕間

―― 7・20・2011 A・D・

そこはとある実験室だった。

純白のNBC防護服に身を包んだ研究員たちが、各々ガラスケースやコンピュータの前で仕事をしている。

こしみず・あきら
小清水明もそのひとりだった。彼は、手を入れるための穴が二つ開いたガラス製のケースに向かって作業していた。

ケースの中には実験用の白いラットが数匹。小清水はラットを捕まえては、特殊な注射器を使って一匹一匹に薬剤を注入していた。

ここ数年、彼が毎日のように繰り返している単調な作業だった。単調な作業の繰り返しほど辛いものはない。

時折注意が散漫になる。

自分でもそれではいけないと思うが、人間というものはそのままで強くない。ついつい注意がおろそかになってしまう。

ここ数日は熱帯夜のせいで夜もよく眠れていないものだから、よけいに注意が散漫だ。

（まったく、どうしてこのクソ暑いときにエアコンが故障するんだ）
業者に修理を頼んだが、いまの時期は依頼が立て込んでいて、来るのは一週間も先だという。

ならいつそ買い換えようかとも思ったが、取り付け工事の方も立て込んでいるので、同じくらい時間が掛かるそうだ。

（まったくツイてない……）

そんなことを考えながら作業をしていた。と、そのとき――

「ツツ！」

注射器を持っていない方の手の人差し指に、刺すような痛みを感じた。

見ると、注射器の針が刺さっていた。捕まえていた手の中でラッ

トが暴れたので、誤って刺してしまったのだ。

小清水は頭が真っ白になった。

（ヤバイ、ヤバイぞ……）

周囲を見回す。

（よし、誰にも見られていない）

小清水は注射器を置いて、ケースから手を抜いた。そのまま踵を返して実験室を出る。

洗淨室を通り抜け、更衣室に入った。

防護服を脱ぐ。はめていたラテックス手袋を外した。

左手の人差し指の先に、ほんのわずかに血が滲んでいた。

（どうしよう……。やはり正直にいつて抗ウィルス薬をもらうべきだろうか？）

小清水は首を振る。

（いや、ダメだ。あれはまだ試験段階……しかも動物実験の段階だ。人間の俺が打ったらどんな副作用が出るか分からないぞ）

彼はもう一度、血の滲んだ指先を見る。

（このくらい……大丈夫だろ、きつと）

彼は無理やり笑顔を作って、自分を納得させた。

（大丈夫、きつと大丈夫さ）

普通の白衣に着替えると、彼はそのまま更衣室を後にした。

幕間（後書き）

感想をお待ちしております。

帰宅（前書き）

今回は登場人物の顔出しです。

まだゾンビは出ません。

ドラえもんとのび太のキャラがカオスなことになっていますが、仕様です。

帰宅

―― 7・28・2011 A.D.

そこは何の変哲もない和室だった。

漫画ばかりが詰まった書棚と、スチール製の無機質な学習机がある以外、これといって特徴のない部屋だ。

その部屋の真ん中に突如、ピンク色のドアが出現した。ドアは独りでに開き、そこから五人の少年少女が出てきた。

「あゝあゝ、すんげえ楽しかったぜえ」

黄色いシャツに短パン姿の眼鏡がいった。

「ああ、本当に楽しかったな」

オレンジのシャツにグレーのパンツを履いたゴリラが応じる。

「また行きてえもんだ」

水色シャツに短パンの鳥顔が付け加えた。

「まったくね」

ピンク色のワンピースを着た茶髪の三つ編み女が頷く。

そして最後に、

「本当に有意義なバカンスだったな。お前らの小学生最後の夏に相応しいぜ」

青いダルマに短い手足をつけたような奴がまとめる。

彼らは最初から順番に、野比のび太、剛田武、骨川スネ夫、源静香、ドラえもんという。

彼らは、ドラえもんに連れられて、一週間を南国で過ごして帰ってきたところだった。

「ドラえもん、本当にありがとな」

「感謝している」

「礼はいわないぜ」

「ありがとねっ！」

四人がそれぞれ礼をいうと、ドラえもんは赤くなる。

「てやんでえ。俺は俺にできることをしただけだ。礼なんていらねえよ」

ドラえもんは、いかにも重たそうなピンクのドアを軽々と持ち上げると、それを腹のポケットに押し込む。

このピンク色のドアは「どこでもドア」といつて、22世紀のオーバーテクノロジーによって作り出された万能転送装置である。十光年以内ならば、どこへでも一瞬で行ける優れものだ。ピンクだからといって、決していかがわしいものではない。

ポケットもドアと同様、22世紀の科学による発明で「四次元ポケット」という。見た目も大きさもブリーフパンツそのものだが、中は広大な四次元空間へと繋がっているのだ、どんなに大きなものでも入るし、あらゆるものをほぼ無限に詰め込むことができるのだ。そう。ドラえもんはこの時代の者ではない。人間ですらない。

彼は22世紀からやってきた、猫型ロボットなのだ。狸型ではない。決してない。

「さて、俺はそろそろ退散するぜ」

とスネ夫。

「お袋に早く顔を見せてやらないとな」

「おれも帰るとする。見飽きた家族の顔も、一週間ぶりなら違って見えるだろう」

「あたしも帰るわ」

そう口々に言い残して、三人は部屋を後にした。

後にはドラえもんとのび太だけが残される。

「やれやれ。さ、オレもお袋に顔見せっかな……」

のび太はつぶやく。

しかし、そういつた直後になぜか横たわった。

「どうした？」

「気が変わった。疲れたから、顔見せんのはひと眠りしてからにするわ」

「呆れた奴だぜ」

「愛想が尽きちまったか？」

「バーカ、逆だ。オメーのそういうところが俺は好きなんだ」
そういつて、ドラえもんはのび太の傍らに横たわった。

帰宅（後書き）

感想お待ちしています。

異変（前書き）

今回から本格的に話が動き出します。

異変

一時間後。のび太は目を覚ました。

「ふぁゝあ。よく寝たぜ」

ちょうど同じ頃、ドラえもんも目を覚ます。

「おう、ドラえもんも起きたか」

「ああ。ひと眠りしたし、そろそろ行くか？」

「それもそうだな」

二人は階段を降りて一階に行った。

「お袋ゝ、親父ゝ、いるか？」

返事がない。

「あるえ？ 留守かな？」

台所の方から物音がした。

「台所か？」

二人は何の気なしにそちらへと向かう。

台所に入ると、そこにはやはり母親（玉子）の姿があった。彼女は流し台の前でうずくまっている。

「よう、お袋。いま帰ったぜ」

母の背中に向かつてのび太はいう。しかし、返事がない。

「あれ？ 聞こえなかった？ オレ帰ったんだけど……」

そういいかけて、言葉を飲み込んだ。

玉子のいる向こう側の床が、鮮血に染まっているのが目に入ったからだ。

そして、その血だまりの中には、顔の半分が骨むき出しになった、父（のび助）の食いちぎられた頭部が転がっていた。

のび太もドラえもんも、言葉を失った。

玉子が二人を振り返る。

その目は完全にイッていた。何と形容したら良いのか、まるで血に飢えた野生動物のように殺気を帯びた、それでいて死人のように

生気のない目だった。

口元にはたつぷりと血が滴っていた。
たま子がゆらりと立ち上がる。一步、また一步と二人の方に近づいてくる。

「やべえッ！」

裏返った声でドラえもんは叫んだ。

のび太は状況が飲み込めずに呆然と立ち尽くしている。

そののび太の手を強引に引いて、ドラえもんは廊下へと走った。
階段を駆け上がり、のび太の部屋へと飛び込む。襖を閉め、一メートルの物差しでつつかい棒をした。

「ふう……。いったい何だったんだ、ありゃ？」

ドラえもんは汗を拭いながらいう。

のび太は相変わらず放心状態だ。

「しっかりしろいッ！」

ドラえもんはのび太の頬を殴った。

のび太はようやく我に返り、

「どどど、ドラえもん！　ありやいったい何なんだ！？」

「俺が訊きてえよ！　だが、とにかくあれは普通じゃなかった」

そのとき――

ドンドンドンドンドン！

襖を激しく叩く音がした。

「きッ、来たあ……」

「くっ……」

つつかい棒のおかげで襖もしばらくは持ち堪えていたが、やがて襖そのものが外れ、モンスターと化した玉子が部屋の中へとなだれ込んできた。

「お、お袋……。い、いろいろストレスが溜まってるのは分かるけどさ、ここはひとつ冷静になろうぜ。ひとまず深……く深呼吸をして……」

のび太の必死の説得もむなしく、玉子は彼に迫ってきた。

いままさに、彼女が彼に爪を立てようとした、その瞬間――

「セコムしてますかーーーーー!!!!!!」

いつの間にか玉子の背後に回っていたドラえもんが、玉子の後頭部めがけて金属バットを振り抜いた。王貞治直伝の一本足打法だった。

骨が砕けるような、肉が潰れるような、嫌な音がした。

玉子の眼鏡が飛び、一緒に眼球も飛び出した。

そして、その場にくずおれた。口から吐瀉物が流れ出し、畳の上に広がる。鼻をつく不快な臭いが部屋中に広がった。

「ハッハー！ 見たかよ？ オレの超ファインプレー！」

血のついたバットを掲げて、誇らしげにドラえもんはいう。

そんな彼に対してのび太は

「何しやがんでえ！ このイカレロボットがッ！！」

思い切り顔を殴りつけた。

しかし、重量129・3キログラムの巨漢にかなう筈もなく、こちらの手が痛んだだけだった。

拳の痛みにうずくまるのび太に対して、ドラえもんは

「バツキヤロオ！ 俺が殺^やんなきゃオメーが死んでたんだぞ。親父さんみたくな。正当防衛だよ！」

とまくしたてた。

「それにしたって加減しろよ！ 見てみる。目ん玉が飛び出しちまつてる」

「てやんでえ、これでも手加減したんだ！ 129・3馬力の俺がフルスイングしたら、オメーの母親の頭は今頃ジャムみてえになつてんぞ」

不毛ない争いがしばらく続いた。

「……だが、それにしたって訳が分かんねえ。どうしてお袋が親父とオレを殺すんだよ？」

少し冷静さを取り戻したのび太が訊く。

「俺が知るか。本人に訊けよ」

「だから本人はオメーが殺したんだろ！」

「生き返らせりゃいい」

「……できるのか？」

「当たり前えだ！ 俺を誰だと思ってる？」

のび太の表情が一気に和らぐ。

「そうかそうか。そうならそうと最初からいえよ、ドラえもん」

「オメーがいわせなかったんだろ、バーカ」

「で、どうやるんだ？」

「タイムふろしきを使うんだ。あれで死体をくるんでやれば、死ぬ前の状態に戻る」

「なるほど」

「さて、えゝタイムふろしきタイムふろしきと……」

ドラえもんは腹のポケットをまさぐる。と、その表情が変わった。

「どうした？」

「……ない」

「は？」

「ない！」

「ないって、何が？」

「だから、ねえんだよ！」

「だから何が？ タイムふろしきがか？」

「ちげえ……」

ドラえもんの顔は、いままで見たことがないほど青ざめていた。

「おい、のび太。ちよつと、手貸してみろ」

「何すんだよ？」

「いいから、俺のポケットに手を入れてみる」

のび太はいわれた通りにする。すると、本来なら空を切る筈の手が、ポケットの『底』に触れた。

「オメーのポケット、しばらく触らねえうちにずいぶん浅くなったな……って、えっ！」

「俺が何をいいたいか分かったか？」

「四次元空間がなくなってる……」

「ああ」

「どういうことだ？」

「さっぱり分かんねえ……」

ドラえもんは押し入れにしまっておりあるもうひとつのポケット——スベアポケットを取り出してみる。

そして、同じように手をつ突っ込んでみるが、やはり結果は同じだった。

「どうやら、ポケットの故障なんていう単純な理由じゃなさそうだ」「じゃあ、何なんだ？」

「分かんねえ。とにかく、いまはつきりしてんのは、四次元空間が綺麗さっぱり消えちまったってことだけだ」

「そんなことがあんのか？」

ドラえもんは首を振る。

「これが初めてだ。だが、全くあり得ない話でもない」

「っていうと？」

「四次元を構成する要素のひとつ——たとえば、時間軸が破壊された場合には起こり得る」

「……日本語で頼むわ」

「つまり、何かの原因で未来がすっかり変わっちゃった場合ってことだ」

そういうと、ドラえもんは思い立ったようにのび太の学習機に向かう。いちばん幅の広い引き出しを開けた。

この中は超空間——すなわち時空を超越した特殊な空間へと繋がっている。この空間を行き来することで、未来や過去に行けるのだ。そして、そこには一台のタイムマシンが係留されていた。これはドラえもんが22世紀から現在に来るのに使ったもので、アラジンに出てくる魔法の絨毯のような形をしている。

ドラえもんは引き出しから超空間に飛び込み、マシンに乗った。そして、何やら機械を操作する。

「何やってんだ、ドラえもん？」

「やっぱりそうか……」

「あん？」

「タイムマシンも動かねえ。どうやら、最悪の状況らしい」

異変（後書き）

感想お待ちしています。

完全包囲

「つまり、未来人の誰かが歴史を変えちまって、そのせいで未来がおかしくなっちまったってことか？」

「そうだ」

「お袋があんなになっちまったのも、関係あるのか？」

「まだそこまでは分かん」

「その未来人は、どの部分の歴史を変えたんだ？」

「それも分かん」

ドラえもんはそこでひと呼吸間を置いた。

「だが仮にだ。仮に、オメーの母親の件と関係があるとすりゃ、変えられたのは現在か、それよりも過去ってことになるだろう」

しばし重い沈黙が横たわった。

「あと、もうひとつ気になってることがある」

「何だ？」

「オメーの母親のことだ」

ドラえもんは畳の上に倒れている玉子の死体に寄った。

「見る。いまさっき流れた血が、もう固まってやがる」

「それがどうした？」

「早過ぎるんだ。こんなことは普通あり得ねえ。それと――」

ドラえもんは玉子の腕を持ち上げる。

「皮膚や指先の肉が腐っちまってら。まるで死んで何日も経った死体みたいだ」

「どういうことだ？」

「さっぱり分かんねえ。だが、お前のお袋さんはただ乱心した訳じゃなさそうだ」

また、重い沈黙。

「やっぱ、警察呼ぶべきか？」

いいにくそうにのび太は訊く。

「それが良いだろ。どのみち、いつまでも死体を放置できない」
のび太はすつくと立ち上がった。

「じゃ、下行って電話してくるわ」

「おう」

のび太は階段を降りて、玄関のところにある電話機に向かった。
受話器を取る。

そして、110番を押そうとしたときだった。

ドンドンドンドンドン!!!!!!

玄関ドアが外から激しく叩かれる音がした。

あまりの音に驚いて、思わず受話器を取り落とす。

「な、何だ何だ?」

ドンドンドンドンドン!!!!!!

音は続く。

のび太は、おそろおそろドアに近づいて行き、覗き穴から外を見た。
すると外には――

人人

人人人人

人人人人人人

人人人人人人人

人人人人人人人人人

人人人人人人人人人人人

「ひええっ!」

思わず声を上げた。後ずさってドアから離れる。

居間の前の廊下まで来た。ふと、居間の方に目をやる。すると、
居間のガラス戸の外にも――

人人人人人人人人人

人人人人人人人人人

人人人人人人人人人

「うわあああああああつ！」

「ギヤーギヤーうつせえんだよ、ボケ！ 小6にもなつてまともに電話もできねえのか」

ドラえもんが不機嫌そうな様子で降りてきた。

「ど、ど、ど、ドラえもん、あれ」

「あん？」

ドラえもんはのび太が指さした先——ガラス戸の外を見た。

「なつ、何だよ、ありやあああああああ！」

「な。な。ヤバいだろ？」

「ああ、ビビった」

「ど、ドラえもん。な、何とかしろよ」

「いわれなくてもやる」

そういうとドラえもんは、その辺のタンスやらテーブルをガラス戸の前に動かし、あつという間にバリケードを築いた。人間なら大人の男数人掛かりでも大変な作業だが、129・3馬力で疲れ知らずのロボットには簡単な仕事だろう。

ドラえもんはその勢いで、玄関と勝手口のドアにもバリケート築いて、一階を完全に封鎖した。

「これで、ひとまずはしのげる……」

ドラえもんは汗を拭いながらいった。

「そ、そうだな……」

のび太もふうとため息をつく。

「つか、何なんだよ、あれ？ ドラえもん」

「知らねえよ！ だが、とにかくやべえことは分かる」

「そいつは同感だ。で、これからどうするよ？」

「そうだな。いつまでもここにはいらねえ。あのバリケードは時間稼ぎにはなつても、いつかは破られる」

ドラえもんはすつと立ち上がった

「おい、のび太。お前は家ん中を探して、水と食料、それと武器になりそうなものや役に立ちそうなものを集めて来い」

「ドラえもんは？」

「俺もできる範囲のことをやる。時間がないぞ。急げ！」

完全包囲（後書き）

感想お待ちしています。

旅立ち（前書き）

マニアックな描写が増えます。

旅立ち

のび太はとりあえず、

カップ麺、缶詰め、カロリーメイト、ミネラルウォーター、ライター、携帯電話（父親名義）、関の刺身包丁、トンカチ、ゴルフクラブ（ミズノの7番アイアン）

を集め、登山用の大きなリュックにまとめた。

のび太がそれを持って二階の自室に入ると、ドラえもんは、米軍払い下げとおぼしき迷彩色の大きなリュックを傍らに置いて、何やら作業をしていた。

しかもなぜか迷彩服姿だ。ボディーアーマーにヘルメットまで被っている。

「何やってんだい？」

「これがピザ作ってるように見えるか、え？ 武器作りだよ。あの連中相手に鈍器と刃物だけじゃ心細いからな」

「ふうん。で、その格好は？」

「ああ、これは前から趣味で集めてる軍の放出品だ。米軍の現用装備だぜ？ あ、お前のもあるぞ」

そういつてドラえもんは、傍らに置いてある軍服を示した。「ヘルメットとボディーアーマー、ブーツは押し入れに入ってる」のび太はそれらをすべて着用した。予想していたよりもずっと重かった。

「なあ。ところで、このヘルメットとかボディーアーマーって本当に銃弾とか防げるのか？」

「当たたりめえよ！ そのボディーアーマーはMTVといって海兵隊が使用しているものだ。中にはケブラー製のソフトアーマーが入っていて、拳銃弾程度なら難なく防げる。こいつにセラミック製のプレートを追加すれば、7.62ミリNATO弾くらいまでは平気かもな。ヘルメットはスペクトラ繊維を樹脂で固めたもので、44

口径マグナム弾の直撃にも耐えられる」

「へえ。で、そっちの口に布を詰めたビール瓶は何だい？」

「モロトフカクテル」

「何それおいしいの？」

「火炎瓶のことだ、バカ！ それくらい常識だぞ」

「知らねえやい！ つーか、ほとんどの一般人はんなこと知らねえよ」

「まあ、家にあつた可燃物をかき集めて作つたから、たいした数はねえが、ないよりマシだろ」

「そうだな」

「よし、そろそろ出るか」

リュックを背負い、金属バットを持つてドラえもんがいった。

「おう。それは良いが、どうやって出るんだ？ 一階は連中に囲まれてるぞ」

「バカか、オメーは。頭を使え。地上がダメなら、二階の窓から出て、空中を民家の屋根伝いに逃げりゃいいんだよ」

「なるほど！」

「分かつたら行くぞ、小僧」

ドラえもんは窓を開け放つ。外はしとんと雨が降っていた。彼はそこから外に出ると、懸垂の要領で屋根に上がった。

のび太も真似をして上がろうとするが

「ダメだ！ 荷物と装備が重くて上がらねえや」

「仕方ねえなあ」

ドラえもんは手を差し出す。

「掴まれ」

「悪いな」

のび太は手を伸ばしてその手を掴む。ドラえもんはのび太を屋根の上まで引つ張り上げた。

「濡れて足元が滑りやすいから、注意しろ」

屋根に上ると、町の様子が見えた。

あちらこちらから火の手が上がっていた。人々の悲鳴も聞こえる。町全体が、まるで戦場のようだった。

「何てこつたい、チクショウ」

吐き捨てるように、ドラえもんはいった。

「まるで地獄だな」

「ああ……」

「どこか安全そうな場所を探そう」

二人はすすきが原の町全体を見渡す。

「学校は無事みたいだぞ。煙が出てない」
のび太がいう。

「らしいな。ひとまず学校に行こう」

ドラえもんが歩き出した。

「ちゃんとして来いよ」

顔だけ振り返ってそういうと、助走をつけてジャンプし、隣の家
の屋根に飛び移った。

のび太もそれにならう。

自宅の屋根を離れ、空中に躍り出た。そして、隣の家
の屋根に見
事着地した——筈だった。

「うわあっ！」

ところが足を滑らせたのび太は、屋根から落ちそうになる。

すんでのところあまたいで雨樋を掴んで落下は免れたが、荷物と装備が重
過ぎて上がることができず、宙づりになってしまった。

下にはいつの間にか、あの不気味な連中（以下、化け物）が群が
っている。落ちたらまず命はない。

「おい、掴まれ！」

ドラえもんが手を出してきた。

「ダメだ！ いま片手を離したら、落っこちまう！」

「そのままでもいずれ落ちる！ いいから手を出せ！」

「無理！」

「出せ！」

だんだん手が痺れてきた。このままではドラえもんがいう通り、遅からず落ちてしまうだろう。

（もう……ダメだ……）

そう思った瞬間、手からふっと力が抜けた。のび太の身体は地球の重力に従って落下を始める。

（ああ、12年……短い人生だったな……）

頭の中を、これまでの思い出が走馬燈のように駆け巡り始めたとき、何かがガツとのび太の手を掴んだ。

のび太はハッと我に返る。

見上げると、ドラえもんが彼の手を掴んでいた。

「バカ野郎！ 簡単に諦めんな！ オメーはここで死んでいい人間じゃねえんだよ！」

「ど、ドラえもん……」

「のび太……」

二人は目と目で見つめ合った。

「いくぞ！」

「おう！」

「フアイトお——」

「いっばあああああああつ！」

ドラえもんはものすごい力でのび太の身体を引き上げた。そして、無事に屋根の上に下ろしたのだった。

下の化け物どもがこちらを見上げて残念そうに吠えている。

「あ、ありがとな」

「気にすんな。俺は俺の仕事をしたただけだ」

「照れんなよ」

「誰が照れるか、バカ」

ドラえもんはそっぽを向いた。しばらくそうしてから

「おい。その荷物重いだろ。持ってやるうか？」

「良いのか？」

「今回だけ特別だ。この件が片付いたら、少し身体を鍛えろ」

「OK」

のび太はリュックを下ろした。ドラえもんはそれを抱え上げる。

「さあ、休憩は終わりだ。今度はちゃんとして来いよ、小僧」

「おう！」

旅立ち（後書き）

感想お待ちしています。

幕間（前書き）

のび太たちは出てきません。

幕間

―― 7 . 2 1 , 2 0 1 1 A . D .

この日、小清水明は研究所に来なかった。

彼の同僚で、大学時代からの友人の大宮登は、おおみや・のぼる心配そうに清水のデスクを見つめた。

（無断欠勤なんてあいづらしくない……）

そう思っ、彼は仕事の合間を縫って何回か小清水の自宅と携帯に電話を試みた。

だが、何回掛けてもどれだけ鳴らしても、彼は出なかった。

（おかしいな……）

いよいよ心配になった大宮は、小清水の婚約者・たかすぎ・りん高杉燐に電話した。携帯に掛けると、ワンコールで彼女は出た。

「もしもし？」

「もしもし、燐さん？ どうも。アンブレラの大宮です」

「ああ、明の同僚の。どうかされました？」

「あの、実はきょう明くんはこちらに顔を出してないんですよ。会社にも連絡がなくて」

「無断欠勤ということですか？」

「そうです」

「おかしいわ。彼がそんなこと……」

「はい。私もそう思っ、けさから明くんにも度も電話をしてくれてなくて。燐さんなら何か知っっているかと」

「いいえ。彼とはきのうから話してないわ」

「そうですか……」

「やだ、心配だわ……。わたし、会社を早退してこれから彼の自宅に行ってみます」

「大丈夫ですか？ なんてしたら、私も一緒しますが」

「いえ、とんでもないです。わざわざ知らせてくださり、ありがとうございます」

そういつて彼女は電話を切った。

大宮はそれでもやはり心配だった。

彼は仕事を早めに抜けて、帰りに小清水の自宅に立ち寄ることにした。

小清水は練馬区月見台のマンションに住んでいる。大宮もそこへは前に何度か行っているが、それなりに良いところだ。

私鉄を降りて、駅から歩く。

数分で目的のマンションの前に来た。と、異変に気づいた。

マンションの前にパトカーや消防車、救急車が停まっていて、人だかりができている。

大宮は嫌な予感がして、そちらに急いで駆け寄った。

「何があつたんですか？」

野次馬のひとりに訊いた。

「ああ。何でも、このマンションで殺人があつたらしいよ」

「さ、殺人？」

「うん。殺されたのは若い女の人だつて。しかも、犯人は逃走中みたいだよ。怖いねえ」

大宮の悪い予感は現実のものになるうとしていた。

「事件があつたのはどの部屋ですか？」

「さあ？ そこまでは……」

大宮はいったんその場を離れた。

携帯を取り出し、ワンセグを起動する。チャンネルをNHKに合わせた。

「……繰り返し、ニュースをお伝えします。きょう午後、東京都練馬区月見台のマンションで、若い女性が無差別に殺害される事件が発生しました。持っていた身分証から、女性は都内に住む高杉燐さん（25）と見られています。死因は現在のところ発表されていま

せんが、目撃者の話によると、首から血を流して倒れていたのとことです。また、このマンションに住む、女性の婚約者の男性の行方が分からなくなっています。警察は、男性が事件について何らかの事情を知っているものと見て、行方を追っています』

そこまで聞いて、大宮は携帯を取り落としした。

同じ頃、月見台総合病院。

二人の女性看護師が、地下の薄暗い廊下をストレッチャーを押し歩いていった。ストレッチャーには大きな白い布が被せられている。彼女たちはある部屋の前で立ち止まった。

『霊安室』

ドアの表札にはそうあった。

スチール製の重い扉を開け、二人はストレッチャーを部屋に運び入れる。

電気がついておらず、室内は暗かった。おまけに寒い。あちらこちらにステンレス製の寝台があり、白い布が被っているものもあれば、何も載っていないものもあった。

看護師たちは、何も載っていない寝台のひとつにストレッチャーを横付けした。布をはがす。

中にあつたのは女性の遺体だった。首の部分には食いちぎられたような無残な傷があつたが、死んでいるので出血はしていなかった。

「一、二の三！」

二人は掛け声とともに女性の遺体を持ち上げ、ストレッチャーから寝台に移した。そして、また布を掛ける。

「さあ、戻りましょう」

そういつて彼女たちが寝台に背を向けたときだった。

どす……。

何か重たいものが落ちるような、鈍い音がした。

驚いた二人はさっと振り返る。

すると、先ほど置いたばかりの女性の遺体が、床に落ちていた。

看護師たちは首をかしげる。

遺体は確かに寝台に載せた。独りでに落ちる筈がないのだ。

怪訝に思いながら、二人は遺体の方に寄って行く。そして、ひとりが手を伸ばした、その瞬間――

突然、遺体が動いた。

そして、差し出された手に噛みついたのだ。

「きゃあああああ！」

看護師は、自分に噛みついていてる遺体を振り払おうと、腕を必死で動かした。そして――

手を食いちぎられた。手首から先全部を。傷口からはおびただしい量の血が噴き出す。

「ぎゃあああああ！」

食いちぎられた看護師はもはや半狂乱状態だった。

床に流れた自分の血で、足を滑らせて転倒する。床に突っ伏した彼女は、もうひとりの看護師に助けを求める。しかし――

「いやあああああ！」

相方は、血の海に倒れる彼女を残して霊安室から逃げ出してしまった。

次第に小さくなっていく相方の足音を聞きながら、彼女は絶望に涙を流した。

そんな彼女が最後に見たもの――それは自分の首筋に噛みつこうとする『動く死体』の犬歯だった。

交通量が少ない深夜の月見台の区道を、若者が真っ赤なランサーエボリューション？を駆っていた。かなりのスピードだ。法定速度を明らかにオーバーしている。

「ヒヤッハー！ 飛ばせ飛ばせ！」

助手席に座るもうひとりの若者が面白がって煽る。

それで良い気になった若者はアクセルを踏み込み、さらにスピードを上げた。

「やっぱ、ランエボはサイコーだぜ！」

そのときだった。

ふいに、前方に人影が現れた。

「うあッ！」

ヘッドライトに浮かび上がった人影を視認した若者は慌ててブレーキを踏んだが、時すでに遅し。

ドン！ という衝撃とともに、通行人の男はボンネットの上に跳ね上げられ、フロントガラスに激突した。

ようやくクルマが停まって、若者二人が慌てて駆け寄ったときには、すでに通行人の男に息はなかった。

「どうしよう、どうしよう？ ヤバいぜ」

運転していた方の若者がいう。

「少し落ち着けよ」

「これが落ち着いてられるかよ！ 良いよな。お前は運転してなかったんだから！ 気楽で」

「気楽なもんか！ 俺と一緒に隣に座ってたんだ。捕まったら俺も罪に問われるんだぞ！」

「だったら、何か考えろよ。良い方法を！」

「……待て。——そうだ！ 手を貸せ」

「どうするつもりだ？」

「死体を動かす。どこか人目につかないところに捨てるんだ」

「それで大丈夫なのか？」

「幸い、まだ誰にも目撃されてない。いまならまだ何とかなる」

「よし。じゃあ、後部座席に載せる」

若者たちは死体を載せて、町の外れを流れるドブ川までクルマを走らせた。

川のほとりにクルマを停める。

二人は、力を合わせて後部座席から男の死体を運び出した。そして、一、二の三で川に投げ捨てた。大きな水しぶきが上がる。

「悪く思つなよ。急に飛び出してきたお前が悪いんだ」
運転者はいった。

「おい。誰かに見られないうちにずかるぞ」

二人はクルマに乗って、その場を走り去った。

後には哀れな男の死体だけが残された。若者たちの知らないことだが、この死体は小清水明だった。彼は婚約者を殺した後、町をふらふら徘徊していたのだ。そして、道に出たところを運悪くあの若者たちにはねられたのだった。

そんな彼の死体に、臭いを嗅ぎつけた小動物が集まってきた。ネズミである。

ネズミたちは死体をかじって、肉を食い荒らし始めた。

これが悪夢の始まりだとは、まだ誰も知らなかった。

幕間（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

爆走（前書き）

自宅を脱出した後のお話です。

引き続きマニアックですみません。

爆走

―― 7・28・2011 A・D・

「しめた。この辺には化け物がいねえぞ」

ドラえもんがいった。そして、屋根からポンと飛び降りる。

「おい！ お前も降りてこい！」

「無茶いうんじゃないやーやい！ 二階の屋根だぞ！ 飛び降りたりなんかしたら、死なねえまでも骨折しちまう」

「安心しろ。俺が受け止めてやる！」

そういつてドラえもんは抱えていた荷物を地面に置いた。

「来い！」

「嫌だ嫌だ嫌だ！」

「俺を信用しろ！ 俺がお前の信頼を裏切ったことが一度でもあるか？」

「あり過ぎて数え切れねえや！」

その言葉に、ドラえもんはショックを受けたのか、下を向いてしまった。

「……確かにな。お前にとって俺は、お世辞にも素晴らしい友人じゃなかったかも知れねえ」

「ドラえもん……」

ドラえもんは再び上を向く。

「でもな、これだけは信じてくれ！ 俺はいつだって、お前の期待に応えようと努力してる。それは、いまも昔も、これからだって変わらないええ！」

「……ドラえもん！」

「のび太あ！」

「行くぜえええ！」

「来いいいいい！」

のび太は屋根の上から躍り出た。

ドラえもんもそれに反応して動く。

「うああああああ！」

「うおおおおおお！」

五分後。

「いててて……」

「……」

「なにが『俺を信用しろ！』だ」

「……すまねえ」

「『すまねえ』じゃねえよ！ 受け止め損ねやがって」

「……」

「まぐれで受け身が成功したから良かったものの、下手すりゃ大怪我してるぞ」

「だから、謝ってんだろーが」

「謝ってすみや警察はいらねーの！」

のび太はしばらくそっぽを向いていた。

「……ドラえもん」

「何だ？」

「そろそろ、行くか？」

「……」

「ここで争ってたって始まらねえだろ」

ニツと笑って、のび太はウィンクした。

ドラえもんも微笑する。

「そうだな」

「じゃ、行こうぜ、相棒」

のび太は置いてあったリュックを背負い、歩き出した。

「おい」

そんな彼に、ドラえもんは後ろから声を掛けた。

「何だ？」

のび太は振り返る。

「歩いて行くつもりか？」

「どういう意味だ？」

「途中で化け物に出くわしたらどうする？ 一匹二匹なら対処もで

きるが、さっきみたいな大群だったら？」

「……一理あるな」

「だろ？」

「だけでもよ、どうすんのさ？ 歩いて行かないとすると」

ドラえもんはSUV車の後部座席の窓を、家から持ってきたトンカチで叩いて割った。このとき、彼はトンカチの『面』ではなく『角』の部分を使った。

クルマの窓ガラスは強化ガラスなので、普通に叩いてもなかなか割れない。

だが実は、強化ガラスというものは、トンカチの角のように先の尖ったもので叩くと簡単に割れるのだ。これは強化ガラスの性質上の弱点である。

ドラえもんはあらかじめそれを理解していたのだろう。彼は割った窓から手を入れ、ドアを開ける。運転席に滑り込んだ。

「やけに手慣れてるじゃねーか。車上荒らしでもやったことあるんじゃないねえの？」

「バーカ！ 災害救助の訓練で習ったんだ。クルマに閉じ込められた人を助ける方法さ」

「なるほど」

ここは、先ほどの場所からそう離れていないところにある駐車スペースだ。いわゆる青空駐車場で、下は砂利敷きである。

何台か停めてあったが、その中でもいちばん大きくて馬力のありそうなこのSUVをドラえもんは選んだ。

「ところで何てクルマだい、こりゃ？ 結構すごそうだが」

「88年式のランドクルーザー60バンVXだ。4リッター、6気

筒の直噴ターボディーゼルエンジン搭載。5段階マニュアルトランスミッションで4WD。年季は入ってるが、整備は行き届いてるみたいだから大丈夫だろう。グリルガードにも錆ひとつ浮いてないかった。オフロード仕様にチューンされてるのも気に入った」

「なるほど。で、どうやって動かすんだい？」

「は？」

「クルマはキーがなきゃ動かねえだろ」

「安心しろ。手先は器用な方だ」

「答えになってねえっちゅーの」

「どうやら、配線を弄ってエンジンを掛けるつもりらしい。どうしてそんな方法を知っているのかは、あえて訊かないことにした。」

「こっやってる間に連中が来たりしてな」

「冗談めかしてのび太はいった。」

しばらくして――

「おい、本当に来やがったよ！」

駐車スペースは南北に走る生活道路に面していたが、その道の北（学校がある方）と南（自宅がある方）両方から化け物の大群が迫ってきたのだ。

「あとちよつとで終わる。足止めしろ！」

「どうやって？」

「火炎瓶だ！ 火炎瓶を使え！」

「どこにある？」

「俺のリュックの中だ」

「リュックは？」

ドラえもんはボンと投げて渡してきた。

のび太はそれを軽い気持ちでキャッチしたが、予想外に重くて尻餅をついてしまった。

「重いなら重いつていえ！」

だが、文句をいっていても始まらないので、とにかくリュックを

開けた。

中にはモロトフカクテルこと火炎瓶の他、いろいろと怪しげなものが詰まっていたが、あえて無視した。

のび太は火炎瓶を一本抜き取り、ライターで火をつけると、南側の化け物どもに向かって思い切り投げつけた。

道幅いっぱいには炎が広がった。化け物も何匹か巻き込まれたようだ。火だるまになってのたうち回っている。

次は北側に投げた。こっちでも効果は絶大だった。

しかし、炎に巻かれても化け物どもは進撃を止めない。

のび太は火炎瓶を投げ続ける。

「おい！ これ以上はもたねえぞ！ あとどれくらいだ？」

「あと五分！」

「……お前、カチカチ山の狸って知ってるか？」

火炎瓶に火をつけながら、低い声でのび太はいった。

「分かった！ 30秒だ。30秒くれ！」

「よし」

のび太は火炎瓶を化け物の方に投げた。その直後――

ブルン……。

力強いエンジン音が響いた。

「掛かったぞ！ 早く乗れ！」

「待ってました」

最後の火炎瓶を投げると、のび太はクルマの助手席に飛び乗った。

「よし、行くぜ！」

ドラえもんは駐車スペースから勢いよくクルマを発進させ――ようとしてブレーキを踏んだ。

「何しやがんでえ！」

急ブレーキでダッシュボードに頭を強打したのび太がいう。

「おい、のび太。誰が道の前も後ろも火の海にしろっていったよ？」

「仕方ねえだろ！ 前から後ろからも来るんだから！」

「じゃあねえ。しっかり掴まってな、小僧」

ドラえもんは数度、エンジンを吹かす。
のび太はシートベルトを締めた。

「行くぜっ！」

タイヤを軋ませ、クルマは猛スピードで発進した。

「ど、ドラえもん！ 前！ 前！」

前方には紅蓮の炎が壁と迫っていた。

しかし、ドラえもんはスピードを緩めない。

「うおおおおおお！」

「うわああああああ！」

クルマは炎の中に突っ込んだ。

ものすごい熱で、肌がヒリヒリする。ゴムの焼けるような嫌な臭いもした。

やがて炎を抜ける。

すると今度は、化け物どもが目の前に立ちはだかった。

「うわああああ……」

ドン、ドン、ドン！

クルマに鈍い衝撃が走る。はねられた化け物がフロントガラスに当たり、血の跡をつけた。

「ヒヤッハー！」

ドラえもんが奇声を上げる。そして

「さっさと逃げればいいものを」

「俺と戦うつもりか」

「人がゴミのようだ！」

などと訳の分からない言葉を発しながら、化け物どもを次々はね飛ばしていく。もはやどちらが悪役か分かったものではない。

そんなことをしているうちに、学校が見えてきた。

「しめた！ 校門が開いてる」

その言葉に、のび太は嫌な予感がした。そして、

「このまま突っ込むぞおおおお！」

的中した。

クルマは開けっ放しの校門を抜けて、校庭に入った。
昇降口近くまで来た。

誰かが倒れている。どうやらすでに死んでいるらしい。その死体を数匹の犬が喰い漁っていた。

しかし、ドラえもんはお構いなしにクルマで特攻していく。その気迫に押されたのか、犬どもは餌を放棄して逃げ出していった。

「しっかり掴まってる！」

そういうとドラえもんは、

「うおおおおおおお！」

急ブレーキを踏み、ステアリングを切った。

クルマは前輪を軸にして扇形にカーブを始めた。車内が無重力状態になった。

カーブしつつも、慣性の法則によりクルマは校舎方向に進み続ける。

「うわあああああああ！」

のび太は思わず絶叫する。そして

「ちわあああああ！ 三河屋でええええす！」

グワツシャーーーーーー！！！！

ドラえもんの叫びとともに、クルマはリアバンパーから昇降口のドアに突っ込んだ。

ドアは大破し、内側に吹っ飛ぶ。背後に下駄箱が迫ってきた。

（ヤバイ！ ぶつかる、ぶるかる！）

そう思ったが、神様が奇跡が起こしてくれたのか、ギリギリのところでクルマは停まった。普段は信心深くないのび太も、このときばかりは神に感謝した。

「ふう……。計算通り……」

ドラえもんは汗を拭う。

「嘘つけ！ 死ぬかと思ったぞ！」

「だが、生きてる」

「ああ、奇跡的にな」

「ちなみに、業界じゃいまのを『ブレーキングドリフト』っていう。まあ、普通はカーブを曲がる時に使うんだがな。良い経験をしたな、小僧」

「こういう形ではしなくなかったけどな」

ドラえもんはエンジンを切り、シートベルトを外す。そして後部座席の方へ移動した。

後ろのハッチを開け、そこから校舎に降り立った。のび太もそれに続く。

「ここにも化け物がいるのかな？」

と、のび太。

「さあな。だが、用心するに越したことはねえ」

ドラえもんは金属バットを握った。

「そうだな」

のび太もゴルフクラブを構える。

「とりあえず、探索だ。まずは、その部屋から始めようか」

昇降口の割と近くにある戸をさして、ドラえもんはいった。表札には保健室とある。

「OK」

二人はその戸に足音を殺して近づく。

そして、戸の両サイドの壁にピタリと背中をつけた。背中をつけたまま、ドラえもんは片手で戸を調べる。

「鍵が掛かってる」

「入れねえのか？」

「なあに、簡単な鍵だ。俺が力一杯引けば開く」

「そうか」

「よし。じゃあ、三で行くぞ。一、二……」

「待て」

「何だ？」

「『三』っていった後に行くのか？ それとも『三』と同時か？」

「はん？ 『三』と同時に決まってるだろうが、小僧」

「決まってたんだ」

「よし。じゃあ、行くぞ。一、二、三！」

ドラえもんによって、戸が勢いよく開け放たれた。

二人は武器を構えて突入する。化け物が出てこようものなら即座に撲殺する覚悟だった。しかし、彼らの目に飛び込んできたのは――

「死ね！ 化け物！」

ショットガンを構えたジャイアンと、

「くっ、来るんじゃないえ！」

こちらにライフルを向けたスネ夫、そして

「待って。彼らは人間よ」

カービン銃を持った静香だった。

爆走（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

幕間（前書き）

のび太たちは出てきません。

感想をユーザーさん以外でも書き込めるようにしました。

どんどんご意見・ご感想を頂けるとありがたいです。

幕間

―― 7 . 2 2 , 2 0 1 1 A . D .

練馬区月見台保健センター。

「いやあ、酷い目に遭ったぜ」

出先から戻ってくるなり、男はぼやいた。薄汚れたボロボロの作業着に身を包んだその男は、ここの環境衛生課の職員で藤堂という。「どうした？」

課長の長沢が訊く。

「いやあ、下水道にネズミが大量発生して困ってるって通報があったので駆除に行ってきたんですが、これが厄介でしてね」

「どう厄介だったんだ？」

「はい……。自分と他の数名で下水道に入ってみたんですが、入るなりネズミの大群が押し寄せて来ましてね。すごかったですよ。その迫ってくる様子は、生き物というより、まるで大きな波のようでした」

「それは怖いな」

「ええ。でもそれで終わりじゃないんです。このネズミどもがやたら凶暴でしてね。我々を包み込んだと思ったら噛みついてくるんですよ」

そういわれて見ると、確かに顔じゅう傷だらけだし、作業着もずたずたになっている。

「災難だったな」

「まったくですよ。一緒に行った同僚は、肉を食いちぎられていま病院ですよ」

「きみは大丈夫なのか？」

「自分がかすり傷です。やけにずきずき痛みますが、薬を塗っておけば直るでしょう」

「お大事にな」

「ありがとうございます」

藤堂は軽く会釈する。

「それで、ネズミ被害の方なんですが」

藤堂は歯の隙間からすーと息を吸い込んだ。

「どうやら、町の下水道全体に及んでいるようで、大規模な消毒を行う必要があります」

「そうか、分かった」

「あと、この件とは直接関係ないんですが」

そう前置きをしてから藤堂は

「きのうからこちらに、人間やペットがネズミに噛まれたという報告が多数寄せられているんです。きょう自分が遭遇した下水道のネズミといい、何かおかしいですよ」

「そうだな。区の保健所とも相談して、何か抜本的な対策を取る必要があるそうだ」

「では、自分はそろそろ上がらせて頂きます」

「ああ、もうそんな時間か」

長沢は腕時計を見て驚いたようにいう。

「失礼します」

藤堂は長沢に頭を下げ、ロッカールームへと引っ込んでいった。

彼の姿が見えなくなってから、長沢は深くため息をついた。

「まったく。いまは原発事故で出た放射性物質の測定作業でただでさえ忙しいのに、何てこった」

同じ頃、サイバーダイニング・アンブレラ東京本部103階。

窓がなくて薄暗いが、とても広い部屋だった。

床には真っ赤な絨毯が敷き詰められている。エレベーターを降りて革靴の底で絨毯を踏みしめたとき、ジョンソンは部屋に数人の男女の姿を認めた。

人種も年齢もバラバラだ。彼らは全員、彼と同じこの会社の特別

顧問で、最高幹部のひとりである。この会社の機構は特殊で、社長など『表向きの』経営陣とは別に、もうひとつの意志決定機関が存在する。それが彼ら最高顧問会議だ。

最高顧問会議の決定は全てに優先される。株主総会ですら彼らから見ると下位に属する。

ただし、この最高顧問会議の存在は一般には知らされておらず、詳しい実態は社員でも知らない。議長に至っては、ジョンソンたち特別顧問ですら名前も知らないありさまだ。

その議長は部屋の最上座——大きくて立派なクルミ材の机の向こうにいた。恰幅の良い白人男性で、背もたれの大きな革張りの椅子に腰掛けている。

薄暗いので顔ははっきり見えないが、それは間違いなく『議長』だった。

「議長。ただいま参りました」

議長は大きく頷いて見せる。

「これより臨時の会議を始める」

「議長。何か重大な問題が発生したのですか？」

ジョンソンは訊いた。

「それについては、マダム・チャンから報告してもらおう。マダム、頼む」

「はい」

マダム・チャンと呼ばれた女性が前に出る。小太りの中年女性で、頭には長い髪を結って作った大きなお団子が乗っかっている。

「昨日、我が社のバイオ研究部門の職員が行方をくらましました」

「それなら俺もニュースで見た。確か、コシミズとかいったな」

顧問のひとりがいった。

「小清水明、28歳。当社バイオ研究部門第13課の所属です」

「第13課だと!？」

ジョンソンは思わず声に出した。

「第13課といえば……」

マダム・チャンは頷く。

サイバーダイナ・アンブレラのバイオ研究部門は、1課から12課まである。

だが、それは表向きで、実際には秘密の『13課』が存在する。

ここでは極秘の研究が行われており、その重要性ゆえ、ひと握りの社員しかその存在を知らない。

「T計画か」

議長は静かな口調でいった。

T計画——それはジョンソンたち特別顧問ですら容易に口に出すことを憚られる、社の最高機密だ。

「コシミズは計画のどの部分に関わっていた？」

議長が訊く。

「はい。小清水研究員はプロジェクトのかなり根幹の部分に関わっていたようです」

「具体的には？」

「ウイルスおよびワクチンの開発とテストです」

「それはまずいな……」

「マダム・チャン」

ジョンソンは議長に代わって質問する。

「きみはつまり、このコシミズという男が計画を持ち逃げしたのではないかと疑っているのか？」

「いいえ」

マダム・チャンは首を振った。

「それはもちろんわたしも、最初はそれを疑いました。でも、違った」

マダムは一枚の写真をジョンソンに手渡した。それを見た瞬間、彼は吐き気に襲われた。

「こ、これは……」

マダムは彼の手から写真を取り戻すと、それを議長に渡した。それを見た議長もまた、眉をひそめる。

「それは、きのう小清水研究員の自宅マンションで殺害された女性です。頸動脈を噛み切られて即死でした」

「普通じゃない……」

こみ上げてくる吐き気をこらえながら、ジョンソンはいった。

「だが、それと本件とどう関係がある？」

「殺されたのは小清水研究員のフィアンセでした」

「……」

「無断欠勤した彼を心配して見に行ったところを殺されたようです」

「彼が殺したとでもいうのか？」

「警察はそう見ています。わたしも」

「殺人の捜査は警察に任せればいいだろ。我々が関知することではない」

「それでもなくなりました」

マダムは一枚の紙を手渡す。新聞記事だった。

『病院で猟奇殺人？ 患者やスタッフらが死傷』

見出しにはそうあった。

「記事の内容を要約すると、きのうの夜、ひとりの女性がいきなり他の人たちに襲いかかって噛みついたそうです。犯人の女性は駆けつけた警官隊によって逮捕されましたが、数人が死亡し、大勢が負傷する大惨事でした」

ジョンソンは背筋が寒くなった。

「ここには書いてありませんが、犯人として逮捕された女性、誰だったと思いますか？」

見当もつかなかった。

「遺体として収容された筈の、小清水研究員のフィアンセです」
脇の下を冷たい汗が流れるのをジョンソンは感じた。

幕間（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

合流（前書き）

ドラ&のびと他のメンバーが合流します。

今回は三人称神視点（作者の視点）です。

マニアックな描写が多いです。

合流

―― 7・28 2011A・D・

保健室に突入したところ、化け物と間違われてジャイアンたちに撃たれそうになったドラえもんとのび太だったが――

「みんな大丈夫だ。彼らは味方だ」

銃を下ろしながら、ジャイアンはいった。

それを聞いて、他の人たちも銃を下ろす。

「悪かったな。危うく撃ち殺すところだったぜ」

ジャイアンはいった。

「こつちこそ、気づくのがあと一秒遅かったら、お前さんを殴り殺してるところだ」

後ろ手に戸を閉めながら、ニコリともせずにドラえもんはいう。

「命拾いした訳か」

「お互いにな」

ジャイアンとドラえもんは、互いに何かを分かり合ったように、

微笑み合っていた。

「なあ、ところでさ」

タイミングを見計らったのび太が発言する。

「この人たち誰？」

部屋にいた、ジャイアン、スネ夫、静香以外の四人を見て訊ねた。すると、部屋のいちばん奥にいた、育ちの良さそうな感じの少女がこちらに出てきて

「はじめまして。わたしはこの学校の生徒会長のみどりかわ・せいな緑川聖奈よ。聖奈って呼んで。よろしくね」

こちらに向かってニッコリと微笑んだ。

その笑顔がまぶしかった。いや、まぶしすぎた。大きくてつばらな瞳から発せられる光は、何十カラットの宝石でもかなわないだろ

う。

艶のあるしなやかな長い黒髪には、アクセントとして青いカチューシャをはめている。服装は制服風のブレザーにリボンタイのついたブラウス、赤と緑のチェックのスカートだった。一見するとずいぶん暗い色の服を着ているように見えるが、彼女は透き通るような純白の肌をしているので、逆に絶妙なコントラストとなって彼女を引き立てている。

のび太は次に脚に注目した。暗い色のスカートと黒のニーソックスの間からのぞく白い肌は、エロチックかつエレガントで絶大な破壊力を誇っていた。

これ以上彼女を直視していると、新たなフェチに目覚めてしまいそうなので、のび太は慌てて視線を静香に移した。

「何よ？」

怪訝そうな目で、静香はこちらを見返してくる。

「いやあ。やつぱりこっちの方が落ち着くなあつて」

「どういう意味よ！」

「しゝずかちゃん」

口を「3」みたいな形にして静香に飛びつこうとしたのび太だったが

「いやっ！」

あっさりかわされ、床にダイブした。

そんな二人のやりとりを無視して、今度はドラえもんが口を開いた。

「おい、その鳥の巣みてえな頭した奴」

「……あん？ 俺か？」

金髪のボサボサ頭でよく日焼けした青年が、きょとんとした表情で自分で自分を指さす。

「この中で他に当てはまる奴がいるか、え？」

「それもそうだな」

「おたくは何者？」

「人に訊く前に、まず自分が名乗るのが礼儀じゃねえか？」

「それもそうだ」

ドラえもんは苦笑する。

「俺は22世紀から来た猫型ロボット・ドラえもんだ。よろしく」

「……からかってんのか？」

むっとした様子で、青年は腰掛けていたソファから立ち上がる。

すると、ジャイアンが

「あ、翁蛾^{おづが}さん。気にしないで下さい。そいつはちょっと頭のネジが飛んじまってまして」

と笑いながらフォローに入った。

すると、今度はドラえもんが気を悪くしたよう

「おい、お前。表に出ろ」

バット片手にジャイアンに詰め寄る。ジャイアンは慌てた様子で「バカ！ 初対面の大人にいきなり『私は未来から来たロボットです。よろしく』なんていつて信じて貰える訳がないだろ」

と小声でささやいた。

「それもそうだ」

「だろ。だから、ここは我慢して話を合わせろ」

「OK。ひとつ『貸し』だぞ」

「ああ」

話をつけたジャイアンは青年の方を向く。

「そういう訳ですから、気にせず話を進めて下さい」

青年は頷いた。

「俺は翁蛾^{おづが・けんじ}健治。フリーターだ。よろしく」

彼らがそんな話をしていると、健治の隣にいたちびっ子がちょこんと前に出てきた。

「僕は山田太郎！ この学校の一年生なんだ」

「おう。よろしくな、坊主」

「坊主じゃないよ、狸さん」

「狸じゃねえ！ 俺は猫だ、ボケ。次に狸なんつったら、ドタマか

ち割って脳みそちゅーちゅーするぞ、ガキ！」

「わあ、面白〜い」

なぜか太郎ははしゃいでいた。子どもの思考というのは時として謎である。

「さて、じゃあ、最後は」

のび太は、銃を持って部屋の隅に立っている初老の男を見た。

「わしは町内会長の金田正宗だ」

彼はいった。

「わしは目の前で妻と娘を奴らに喰われたんだ！ やつとこのことでここまで辿り着いたが、もうどこにも動かんぞ！」

シヨックとストレスで、ひどく憔悴した様子だった。この調子では、この件が片付いても長く病院にかかることになるだろう。

「最後はオレか」

のび太は軽く咳払いした。

「オレは野比のび太。この学校の6年だ。よろしく」

「よし。全員が知り合ったところで情報交換するぞ」

ドラえもんが切り出す。

「じゃあ、まず訊く。お前ら、その武器はどっから調達した？」

まず聖奈が答える。

「この拳銃は交番の近くで拾ったわ。死んだ警察官が持ってたの」
彼女が見せたのは、日本警察が制式採用しているリボルバー、S & W M360J “サクラ” だった。俗に『スミス&ウエッソンの38口径』と呼ばれ、小型リボルバーの代名詞的存在であるM36のバリエーションのひとつだ。アメリカではとても有名な銃で、多くの映画や小説に登場している。装弾数は38口径弾が5発と、メインアームとしてはやや頼りないが、人に対する威力は申し分ない。「これはもともと家にあったものだ。わしは趣味で狩りをするのでな」

金田が大事そうに抱えていたのは、モロト・ヴェーブル308というロシア製の半自動小銃だった。カラシニコフ機関銃の機構をそ

のまま流用して作られたというユニークな銃だ。西側のスナイパーがよく使用する強力な308ウィンチエスター弾を使用し、5連発の脱着式マガジンによって給弾する。レシーバー横のマウントレールにはスワロフスキーの光学スコープが搭載されていた。

「あたしはスネ夫から貰ったわ」

静香が持っていたのは『ホーワカービン』と俗称される豊和M300カービンだ。戦後初の国産（ライセンス生産）ライフルで、かつては自衛隊でも使われていた。カービンとは銃身を切り詰めて小型化したライフルのことで、射程と威力に劣るが軽量で取り回しに優れている。半自動式で、取り外し可能なボックスマガジンから給弾する。本来は15連もしくは30連マガジンを使う銃だが、国内では銃刀法によって5連マガジンだけの仕様となっている……筈なのだが――

「おい、それはどう見ても軍用の30連マガジンだぞ……」

青ざめた表情でドラえもんはつぶやいた。

彼がどうしてそんな顔をしたのか理解できなかったのだろう、のび太は勝手に話を進めた。

「スネ夫はどこから手に入れたんだ？」

「親父のコレクションさ」

「会社社長の？」

「ああ。会社社長ともなるとそれに見合った趣味を持つもんでな。競技射撃と狩猟が趣味なんだ」

「ふーん」

「それで、家を出るときに持ち出したんだ。銃と弾薬、ありったけな」

そういつてスネ夫は、自分の得物をちらつかせた。ロシア製のタイガーという半自動小銃だ。これは軍用狙撃銃として有名なドラゲノフの民間モデルで、装弾数が5発に制限されている以外は軍用と何ら変わらない。軽量化のためにくりぬかれた銃床が特徴のライフルで、強力な7.62ミリモシン・ナガン弾を使用する。レシーバ

「横のマウントレールには、4倍固定倍率のP S O - 1スコープが搭載されていた。」

「おれもスネ夫に分けて貰ったんだ」

ジャイアンは手に持った黒いショットガンを示す。イタリア製のベネリM3スーパーパー90だった。切り替えにより半自動とポンプアクションどちらでも撃つことができる優れたもので、各国の軍や警察で採用されている。給弾は銃身下のチューブ式マガジンから行う。本来の装弾数は7発だが、銃刀法により薬室内も含めて3発に制限されている。

「俺も一丁借りた」

ソファの前のテーブルに置いた銃をさして翁蛾はいう。ミロクM2800スキートという、国産の上下2連ショットガンだった。高い精度が要求される競技銃なので、銃身の熱で発生した陽炎かげろうが照準を狂わせないように、銃身の上に放熱板を備えている。

「なあ、スネ夫。どうでもいいが、静香が持つてるカービンのマガジンはどう見ても軍用だよな」

ドラえもんはまだそこに拘っていた。

すると、スネ夫は

「ああ。あの銃は死んだ爺さんのコレクションだったんだ。発売されてすぐに買ったんだと。その頃は30連マガジンも合法的に入手できたそうだが。それがそのまんまになってたんだな」

平然とそう答える。

「おいおい。それ、犯罪だろ……。よく摘発されなかったな」

「知ってるか？ 権力に対する絶対的な防衛は『力ネ』なんだ。力ネさえあれば、法律なんてどうにでもなる」

「それ、思い切り犯罪者の台詞だよな？」

「おい、坊主。お前はさすがに持ってねえよな？」

念のため、のび太は訊ねる。

すると、太郎はニツコリ笑って

「うっん。持つてるよ！」

ズボンの背中に背負っていたナップザックから、何かを取り出した。それは――

「コルトSAA!」

ドラえもんが絶叫した。そして、慌ててそれを取り上げる。

「返してよ、狸さん」

「狸じゃねえつつつてんだろ!　しばくぞ、コラ!」

「ドラえもん、それ、本物なのか?」

「いいや、おもちゃだ。銃身がプラスチックでできてる。まったく、脅かしやがって」

「な〜んだ」

「しかし、良くできてるな〜。どこの製品だ?　刻印は……え〜、なになに?　『コルト・シングルアクション・アーミー45』?　なるほどね……って、おい!」

「どうした?」

「これ、タナカのカシオペアモデルじゃねえか!」

「日本語で頼むわ」

「2008年に発売されたモデルなんだが、無改造で実弾が撃てることが分かっちゃって所持することが禁止になったんだよ。……おい、小僧。どうしてお前が持つてる?」

「お父さんのお部屋にあったの」

「お父さああああああん!」

「とにかく、危ないからこれはお兄ちゃんたちが預かっておくよ。良いよな?」

「え……あ、うん」

渋々だが納得したので、のび太はそれを自分のリュックにしまった。

合流（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ジャイアン無双！ Part 1（前書き）

タイトルのまんまですw

ジャイアン無双！ Part 1

「じゃあ、次の質問だ。お前らがここに来るまでのいきさつを話してみろ」

そういつて、まずドラえもんが自分たちのことを話した。金田を除く全員が、熱心に聞き入っていた。

それが終わると、

「——じゃあ次は……ジャイアン、お前な」

「おれか？ おれは、のび太の家を出た後——」

ジャイアンが話し始める。以下、ジャイアン視点で一時間前からの回想。

のび太の部屋を出たジャイアンたちは、談笑しながら一階へと下りた。

「あら？ 誰もいないのかしら？」

静香がふといった。

「そっぴゃあ、バカに静かだな」

とスネ夫。

「おじさん、おばさん。どうもお邪魔しました」

誰もいなくても、挨拶だけは率先してするジャイアン。感心である。

「帰ったら何するよ？ オレは塾の夏期講習だ。冬には受験だからな。そろそろ本腰入れねえと」

「スネ夫は私立を狙ってるんだっけ？ 大変だな。おれは帰ったら家の手伝いだ」

「あたしはバイオリンのお稽古よ」

「オレらも来年から中坊か。早いもんだな……」

「まったくだぜ。おれらがこうして一緒にいられるのも、あと少しの間か……」

「寂しいわね」

三人は玄関まで来た。このドアをくぐれば彼らは嫌でも現実引き戻される。平凡で退屈で、そしてちょっぴり苦い現実――

その筈だった。しかし――

待っていたのは地獄だった。

ドアを少し開けた瞬間、鼻の粘膜に強い痛みを感じたジャイアンは慌ててドアを閉めた。

「ぐっ……。な、何だ、いまのは!？」

彼は激しく咳き込んだ。

少し息を整えてから、ジャイアンは再びドアを開ける。

刺激の正体が『臭い』であることに彼は気づいた。いままでに嗅いだこともないような、酷い悪臭だった。あえて例えるならば、ゴムとプラスチック、そして大量の髪の毛をまとめて燃やしたような、とてつもなく強烈な臭気である。

臭いに咽^むせて、スネ夫は玄関の外で嘔吐した。ジャイアンも胃が裏返るような不快感を感じたが、ぐっと我慢した。

「な、何なのよ? これ……」

鼻と口をハンカチで押さえながら、静香はいう。

臭いの正体を探ろうと、ジャイアンは門の外に出た。

「なっ、何だ、これは……」

彼が見たもの、それは――

道にできたいくつもの血だまりと、その中に転がる死体。炎上するクルマ、そして死体に群がりそれを喰らう人々だった。

「うわあああああああ!」

あまりに変わり果てた町の姿に、ジャイアンは思わず絶叫する。その悲鳴を聞いて、スネ夫と静香も慌てて出てきた。

「こっ、これは……」

「何てこと……」

後から来た二人も、あまいの光景に言葉を失った。

「いったい、何があったんだ……」

「ジャイアン……」

「うちは大丈夫かしら？」

「よし。とりあえず、各自家に戻ろう。そうすれば、何か分かるだろう」

「ちよつ、ちよつと待て！ この中を帰るのかよ？ 家まで……たつたひとりで……」

「確かに怖いわね……。でも、たけしのいう通りだね。いまはまず、家族の無事を確かめるのが先決よ」

「よし。じゃあ、みんな。気をつけてな」

三人はそれぞれ家路についた。

「そして、おれが帰る途中のことだ」

「チクシヨウめ！」

ジャイアンは息を切らして全力疾走していた。

後ろから、例の死体を喰う人々（以下、化け物）が大挙して押し寄せて来ているからだ。全員血まみれで、不気味な低い呻き^{うめ}声を上げている。

「どんどん増えてきやがる！」

と、彼の足が止まった。

「クソッ！」

道の前方からも化け物どもがやって来たのだ。

「挟み撃ちか……」

ジャイアンは辺りを見回す。道の両側には高いブロック塀が立っていて逃げ道はない。

「万事休すってか」

と、道の端のゴミを入れるためのポリバケツに目が留まった。その瞬間、ジャイアンの中で、とっさにひとつのアイデアが閃いた。
「いっちょやるか！」

ジャイアンは助走をつけてポリバケツに向かっていく。

「うおおおおおおおおお！」

バケツを踏み台にして高くジャンプすると、塀にしがみついた。

「いよつと……」

ぶら下がった体勢からジャイアンは、懸垂の要領で塀の上に上がった。塀の上に立った彼は、道を見下ろす。

化け物どもは彼の足元辺りに群がっているが、塀が高すぎて手が届かないらしい。悔しそうにこちらを見上げて吠えている。

「ざまあ見る！」

「そうやってその場を切り抜けたおれは、何とか家に辿り着いたんだ」

ジャイアンの家は雑貨屋を営んでいて、彼ら家族は店舗を兼ねた住宅に住んでいる。

彼が家に戻ると、店舗部分のシャッターは固く閉ざされていた。ジャイアンは裏に回り、勝手口の鍵を開けて中に入る。

なぜか家中の雨戸が閉められていて、屋内はとても暗かった。手探りで電灯のスイッチを探して入れるが、点かなかった。

「停電か？」

彼は近くにあつた懐中電灯を手に取り、その明かりを頼りにして奥に進んだ。

「母さん！ 父さん！ ジャイ子！ みんなどこだ？」

返事はなかった。嫌な予感がした。ジャイアンは注意して、さらに奥へと進む。

と、居間の方から物音がした。

「母さん？ 父さん？ それともジャイ子か？」

「たけし……かい？」

しゃがれた声がした。ジャイアンはそちらに光を向ける。

「母さん！」

そこにはいたのは、彼の母親だった。畳の上に四つん這いになっ

ていた。それを見てジャイアンは慌てて駆け寄ろうとする。しかし
「来るんじゃない！」

いさめられて、彼は立ち止まった。

「来るんじゃないよ」

「どうしてだ？」

「お前には生き残って欲しいからさ……」

「どういう意味だ？」

「……説明してる暇はないんだ。良いかい？ あたしのこれからい
うことをよく聞くんだよ」

「……」

「町は封鎖されてて、外には出られない。……だから、とにかくお
前は学校に逃げるんだ。あそこなら人がたくさんいるし、助けも真
っ先に来るだろうからね」

「何をいつてるか分からないよ、母さん」

「いいから！ とにかくいう通りにするんだよ！」

「……母さん、父さんとジャイ子は？」

「父さんは死んだよ。あいつらに殺られた……。ジャイ子は……分
からない……」

「殺られたって……。いったい誰に？」

そのとき、ジャイアンの脳裏に先ほどの化け物どものことが浮か
んだ。

「あの化け物どもにか？ そうなのか、母さん？」

母は弱々しく頷く。

「何てこった！ おれが一週間も留守にしていたばかりに。チク
ショウ！」

「お前のせいじゃないよ、たけし……。むしろ、余所に行つて良
かったよ。ここにいたら、たぶん……お前も無事ではいなかった……」

……

「母さん……。この町にいったい何が？」

「詳しく話してる暇はない……。何があつたかはいずれお前にも分

かる。とにかく……いまは逃げるんだ」

「母さんはどうするんだ。置いていけないよ！」

「いや、ダメだ！ あたしはもう感染してる。あたしを連れて行ったら……あつ、うつ……」

母は苦しそうに背中を丸めた。

「母さん！」

ジャイアンはたまらず母の元に駆け寄る。

「母さん！ しっかり！」

「……ああ、たけし。何も見えないよ……あんたの顔も……」

「母さん……」

「こんなことなら、もっと優しくするんだったね……。良い母親じゃなくてごめんね」

ジャイアンは涙を溜ながらかぶりを振る。

「そんなことないよ！ 母さんはおれにとって最高の母さんだ！ 昔もいまも、これからだって！」

「ありがとう……ありがとう……」

母の頬を一筋の涙が伝った。

「最後にあんたの声が聞けて、嬉しいよ。これであたしはひとりじゃない……」

「母さん！」

「逃げるときは父さんのクルマを使いな。運転の仕方は分かるね？ あんたはよく父さんと乗ってたから」

「……」

「強く……生きるん……だ……よ……」

母は血反吐を吐いて倒れ、そのまま動かなくなった。

「母……さん？」

返事はない。

「母さん！」

慌てて脈を取る。——ない。

息も——していない。

「母さああああああん!!!」

ジャイアンの目から大粒の涙が噴き出した。

「ち、チクシヨウ! このまま死なせてたまるかよ……」

ジャイアンは立ち上がると、居間の隅に置いてある電話機に向かった。

受話器を取る。119番をプッシュした。しかし、スピーカーからは何の音も聞こえてこなかった。

「どうして繋がらねんだよ!」

彼は受話器を叩きつけた。と、そのとき――

ガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシヤガシヤガシヤ!!!

店のシャッターを激しく叩く音が聞こえた。

ジャイアンは懷中電灯を片手にシャッターの方へと駆け寄る。そして、郵便物の投函口から外を見た。すると――

人

人

人

人

人

人

「うおおおッ!」

いつの間にか集まったのか、化け物どもが殺到していた。

ガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシヤガシヤガシヤ!!!

化け物どもが叩くたび、金属製のシャッターは大きく波打つ。

(これじゃ、長くはもたないぞ……)

と、そのとき――

カラン……。

何か金属性の音がした。そちらに光を向ける。すると、そこには一本のボールが転がっていた。

ジャイアンはそれを拾い上げた。

「父さんがいつもシャッターの上げ下ろしに使ってたやつだ」
袖で涙を拭う。

「よし！」

ジャイアンは居間に戻り、もはや動かなくなった母を見つめた。

「母さん、おれ、必ず生き残る！　どんなことがあっても、必ず！」

「うおおおおおおおつ！」

ジャイアンの話をそこまで聞いて、ドラえもんは号泣した。

「うつせんだよ！　せつかく良い雰囲気になってたのにぶち壊すんじゃない！」

「だってよ、すっげえ良い話じゃねえか！」

「確かにそうだが、人の母親を金属バットで殴り殺して平然としてた奴にいわれたくない」

「あ、ジャイアン。続き頼むわ」

「おい、話を逸らすなよ」

「続けてもいいか？」

「あ、どうぞ」

ジャイアンは続けた。

「それで、おれはキーを取って、父さんの軽トラに乗ったんだ」

「車種は？」

「ドラえもんが横槍を入れる。

「99年式のサンバーだ」

「良いクルマだな」

「ありがとう」

勝手口から出たジャイアンは、家の横のスペースに停めてあるサンバーに乗り込んだ。

ジャイアンは家から持ってきたボールと懐中電灯を手に、走る。もし、施錠されていたらボールを使ってこじ開ける積もりでいたが、幸い玄関の鍵は開いていた。

ドアを開け放ち、ジャイアンは突入する。と、顔の横を何かがものすごい勢いで掠めていった。

ッー……。

片方の頬から血が垂れる。

「こつ、これは……」

後ろを見た。一本の果物ナイフが転がっていた。中から誰かが投げてきたらしい。

「た、たけし？」

家の奥から声がした。

「たけしなの？」

「静香！ おれだ！ 無事なのか？」

「え、ええ……。あたしは無事よ」

「上がったも良いか？」

「……ええ」

非常時なので、ジャイアンは土足で玄関を上がった。

「静香！」

「こつちよ」

静香はキッチンにいた。

「大丈夫か？」

「ええ。でも……」

静香が視線を投げかけた先には、静香の父・義男が頭から血を流して倒れていた。そして、その向こうには母親も……。

「家に帰ったら、誰の姿も見えなくて……。それで、キッチンの方に進んだら、パパがママを……」

ジャイアンは顔を背けた。

「それで、悲鳴を上げたら今度はあたしを襲おうとしたから、近くにあったこれとつさに……」

彼女が視線を送った先には、べつとりと血のついたミートハンマーが転がっていた。

「……辛かったな」

「ええ……」

ジャイアンはそつと静香の身体を抱き寄せた。静香も彼に身体を預ける。彼女は、彼の胸の中でさめざめと泣いていた。

「ちょっと待ったああああああ!!!!」

「何だよ、のび太？ 話の腰を折って」

口をすぼめてジャイアンがいう。

「いやいやいや。ここは突っ込むところだぞ、主人公として。どう考えたって、そこはオレのパートだろ」

「だって、その場にはおれしかなかったし」

「それでもさ、こんなの絶対おかしいよ！」

「おい、小僧。みつともねえぞ」

ドラえもんが横槍を入れる。

「だって……」

「その時間、ぐっすりおねんねしてたおめえに文句をいう資格はねえ」

「お前も寝てただろが！」

「……まあ、そこはイーブンってことで」

「意味が分かんねえよ！」

「……なあ、続けて良いか？」

「構わねえ。続ける」

錯乱状態ののび太を無視して、ドラえもんがいった。

「それで、静香がちょっと落ち着いてから、おれらは一緒に、スネ夫の家に向かったんだ」

ジャイアン無双！ Part 1（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ジャイアン無双！ P a r t 2（前書き）

ジャイアン無双の後編です。

ジャイアン無双！ Part 2

「静香。大丈夫か？」

スネ夫の家の前にクルマを停めて、ジャイアンは訊ねる。

「……ええ。もう平気」

真っ赤に泣きはらした目で、静香はいった。

「おれはこれからスネ夫のところに行かなきゃならない。ここで待っていてくれるか？」

「ううん。あたしも行くわ」

「無理をするな」

「いいえ、行かせて！ いつまでもお荷物扱いなんて、あたしは嫌よ！」

「静香……」

彼女の目は真剣だった。

ジャイアンは頷く。

「良いだろう。その代わり、絶対に離れるなよ」

「分かってるわ」

二人はクルマを降りた。開いたままの門をくぐって、敷地に入る。ジャイアンはボールを、静香は懐中電灯を持って、玄関へと近づいていった。

ゆっくりとドアノブを回す。開いてる。

ジャイアンを先頭に二人は中に入った。

後ろから静香に照らして貰いながら、ジャイアンは慎重に奥へと進んだ。

ガタン……。

物が倒れる音がした。

「誰がいるわ」

静香がささやいた。

「シッ！」

二人は音のした方に進む。居間に行き着いた。ドアを開けると――

「ひっ、ひええええ……」

「ヴウウウウ……」

屍餅をついたまま後ずさるスネ夫と、そんな彼にじりじりと彼に迫るスネ夫ママがいた。スネ夫ママは血まみれで、明らかに普通ではなかった。

「静香。ここにいろ！」

そういいのこしてジャイアンは

「うおおおおおおおお！」

スネ夫ママの方に突進していった。そして、バールを振りかぶった。

骨の碎けるような音と、何か柔らかいものを潰したような音が同時に響いた。

スネ夫ママは床に崩れ落ちた。

「おい、スネ夫！ 無事か？」

「ジャっ、ジャイアン……」

「立てるか？」

スネ夫は自力で立ち上がろうとするが、腰が抜けてしまっているらしくうまくいかない。

「ほら、掴まれ」

ジャイアンは手を貸して立たせてやった。すると、彼のいた床が濡れていることに気がついた。

スネ夫もそれに気づいたらしく

「こっ、これは何でもないんだ！ 決して漏らした訳じゃないんだからな！」

必死にいい張った。

「可愛い奴だよ、お前は」

ジャイアンは苦笑した。

「で、その後は、家にあった銃と弾を回収して、ここまで来たんだ」

ジャイアンは締めくくった。

「ちよつと待った」

「何だよ、ドラえもん？」

「お前のサンバーはトラックか？ バンか？」

「トラックだが？」

「それだと、二人しか乗れない計算だぞ。どうやって三人で来た？」

「オレが荷台に乗ったんだよ！」

腹立たしそうにスネ夫がいった。

「ああ、そういうことか。シヨンベン漏らしをシートに座らせる訳にはいかないからな」

「失礼な！ スボンとパンツは履き替えたぞ！」

「まあ、とにかく三人が来た経緯は分かった。じゃあ、次は……」

「俺の番かな？」

翁蛾が立ち上がる。

「まあ、ジジイとチビ、鳥の巣頭は飛ばすとして……」

「おい、青狸。ジジイと太郎はともかく、どうして俺を飛ばすんだ？」

「だって面白くなさそうなんだもん」

「面白くなさそうって……」

「どうせあれだろ？ たまたま持ってた護身用ナイフのお陰で助かりましたとかいうんだろ？」

「まあ、実際そうなんだけどな」

「だろ？ そんなありきたりな話なんか誰も求めてねえんだよ」

「……」

「つい訳で、その女。次頼むわ」

「わっ、わたしですか？」

聖奈は少し驚いた様子で声を上げた。

「えーと、わたしはそんな皆さんに特別にお話するようないことはいいんですが……」

「良いから、話してみる。やらかしたことを」

「そうですか。じゃあ。ええと、わたし、実は三日前からここに
いるんです」

「三日前!？」

驚いた様子でのび太は訊く。

「はい。皆さん知っているとありますが、三日前から町で変な事件
が起こり始めて……。家族もみんなおかしくなったの。それでわた
し、怖くて怖くて……」

聖奈はうつむいた。

「大丈夫か？ 聖奈ちゃん」

のび太は彼女の肩にポンと手を置く。

「やっとのことで逃げて来たんだな。可哀想に」

「うつん」

聖奈は顔を上げた。

「近くにあった鉈で、み^{なた}んな殺しちゃった」

「!？」

すると彼女は目を輝かせて

「鉈ってすごいよね。人間の首を簡単に切断できちゃうんだもん」
熱く語り出した。

のび太は目が点になった。

「ここに来る途中でも何人かに襲われたんだけど、楽しいから勢い
でみ^{んな}な殺っちゃった。ほら、これよ!」

そういつて彼女は、刀身が血に染まった鉈を取り出して見せた。

柄に対して不自然に刀身が長い。柄の二倍くらいある。そしてやた
らデカい。

「おい、ちょっと待て。それ鉈じゃない……。ククリだ」
青ざめた顔でドラえもんはいった。

ククリとは、ネパールのグルカ族が使用する伝統の武器だ。「く
の字型に大きく湾曲した刀身が特徴で、高い殺傷能力を誇っている。
「綺麗でしょ？ すごく素敵。これがあればご飯何杯でもいけち
やいそう。うふふふ……」

ククリを見つめる彼女の目は確かにイッていた。化け物どもとは別の意味で。だが、これはこれである意味、人間として終わっているような気がする。

「トリガーハッピーならぬ、ブレイドハッピーか……」

小声でドラえもんがつぶやいた。

「誰がうまいことをいえと」

棒読みでのび太は突っ込む。

「彼女、いったいどうしたんだろう？ 生徒会長をやってるくらいだから、普段は（たぶん）真面目な娘だろうに……」

「恐怖が限界を超えて、彼女の中で『何か』のリミッターが外れたのかもな」

「それはフロイト的解釈？」

「いや。俺的解釈」

「うふふふ……。わたしの可愛い子……」

すっかりキャラが崩壊した聖奈をほっというて、一行は話を進めることにした。

「ところで、いまの話によると、異変は三日前から起こり始めたらしいな」

ドラえもんがいった。

「おい？ 『らしい』ってどういうことだ？ お前ら、この町で何があったか知らねえのか？」

翁蛾が怪訝そうに訊いてきた。

「ああ、チャラ男。俺らはここ一週間ほど、国外にいたんでな」

「チャラ男いうな！ っていうか、町は昨日から封鎖されてる筈だぞ。どうやって入ってきたんだ？」

「教えねえ」

「何でだよ？」

「説明したってどうせ信じねえんだろ？ さっきだって信じなかったじゃねえか！」

「あんな話が信じられる訳ねえだろ！」

「だからいわねえつつつてんだ！」

「ストーリーップ！」

ジャイアンが二人の間に割って入る。

「ここで無意味にいい争っていても仕方がない。話を先に進めよう」

「そつ、それもそうだな……」

「ああ。納得はいかねえが、俺もその意見には賛成だ」

ドラえもんとうんちんはそれぞれ刃を引つ込めた。

「それで、うんちんさん。何があつたか教えてくださいますか？」

ジャイアンが代表して質問する。

こくり、うんちんは頷く。

ジャイアン無双！ P a r t 2（後書き）

次回、町で何があつたのかが分かります。

ご意見・ご感想お待ちしています。

7月25日（前書き）

更新が遅くなってすみません。

翁蛾の回想シーンです。

短いです。

7月25日

「三日前——つまり、25日のことだ。俺はその日、午後からバイトが入っていたから、昼頃起きて何となくテレビを点けた。するとだ、臨時ニュースをやってて、この月見台で暴動が発生してると騒いでた」

「暴動？」

「ああ」

「あんな平和だった町で、どうして？」

「発端は町の中心部で起きた通り魔事件らしい」

「通り魔事件？」

「ああ。朝の通勤時間帯に、駅前のメインストリートで、ある通行人が別の通行人に突然襲い掛かったらしい。そいつは駆けつけた警官にすぐ取り押さえられたんだが、それを皮切りに、町のあちこちで人が人を襲い始めたそうだ」

「人が人を……」

「犠牲者の数は瞬く間に増えた。翌26日には事件は暴動に発展。地元警察では手に負えなくなった」

「……」

「そこで警視庁の機動隊が出動。放水車も動員したが、鎮圧することはできず、町は大混乱に」

「……」

「停電が起きて、電話も携帯も通じなくなった。ネットも。それからしばらくして自衛隊のヘリが飛んできた。スピーカーでこう叫んでいた。『非常事態宣言が出された。町は封鎖されていて、出入りできない。一般住民は避難所に行くか、自宅にとどまるように』と」

「おれたちがいない間にそんなことが……」

「俺は自分の判断でここまで避難してきたが、町が封鎖されているのはどうやら本当だ。町を出る全ての道路が封鎖されていて、逃げ

「られなかったといってる奴がいた」

「いたい、この町で何が起こってるんだ……」
ジャイアンは低くつぶやいた。

7月25日（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6532x/>

ドラえもののび太のバイオハザード

2011年11月9日20時16分発行